

## 幼児の家庭刺激に関する研究

上 田 礼 子

要約：急速な都市化現象は家庭にもさまざまな変化をもたらし、子どもの発達上必ずしも好ましくない状況も出現してきている。本研究は時代差および地域差に関する調査を実施し、幼児の発達上リスクの高い家庭刺激を見つけるためのスクリーニング用項目を明らかにした。

見出し語：幼児の家庭環境、家庭環境の時代差、地域差、スクリーニング

研究目的：本研究は、Caldwell, B. の提唱する家庭刺激の考え方に準拠して、発達行動生態学的立場から作成した質問項目を実施してから10年を経過したので家庭刺激の時代による変化の様相を知ること、また、伝統的な地域差が消失しつつあるといわれている今日家庭刺激の地域差の様相を知ることであった。同時に、これは幼児の発達にとって重要な家庭養育環境上のスクリーニング用質問項目の選定を意味している。

研究対象と方法：時代差の調査対象は、東京都K市に在住する3歳児とその母親(1986)であり

東京都立医療技術短期大学  
(Tokyo Metropolitan College of Allied Medical Sciences)

著者が10年前に実施した調査と同一地域であった。また地域差の調査対象は東京都に在住する3歳児(都下A群と特別区B群)と沖縄県宮古島に在住する3歳児(M群)およびこれらの母親達であった。方法は質問紙法であり、母親に記入を依頼した。回収された質問紙の分析に際しては子どもに遅滞・異常の疑いのあるものを除外し、家庭刺激に関する項目を中心に同一年齢児の時代および地域による差異と類似性を比較検討する方法をとった。

結果：①時代により変化のある家庭刺激

10年前の調査結果と比較すると、“おやつ”や“起床”の時間を決めている者が増加し、

“テレビ番組を選んでやっているもの”が増加していた。しかし、就寝時間を決めている者は減少し、また、“ひとり寝をさせる者”も減少しており、これらは子どもの発達レベルにあわせて親がしつけを行うという一貫した方向で変化しているとはいいがたい結果であった。

### ②地域により変化のある家庭刺激

東京都のA群、B群の間の差がなく、これらの両群をM群と比較すると有意差の認められる項目があった。これらの項目は対象者の背景から推測すると父親の労働形態や母親の職業の有無と種類、および家族形態、集団保育の経験の有無などと関係しているようであった。

### ③時代および地域をこえて類似する家庭刺激

時代差がなく、また異なる地域においても類似して幼児の親として共通する行動5項目が認められた。

考察：幼児の家庭刺激につき時代差と地域差を中心に検討した結果、差異と同時に類似性も明らかになった。類似する5項目は3歳児をもつ家庭に時代と地域にかかわらず、かなり一般的にみられる刺激と解釈される。逆に、これらの家庭刺激に著しく無関心であったり、親がこれらとかけはなれた行動をとっている場合には子どもの発達上リスクの高い家庭といえよう。したがって、これら5項目をスクリーニング用に活用し、子どもの発達支援の立場からより詳細な観察を必要とするものをみつけ、保健相談に応じることができると考える。

文献：

- 1) 上田礼子、権原清子、家庭刺激と幼児の発達、保健の科学 21(7) 512~516 1979
- 2) 上田礼子、幼児の家庭刺激に関する研究(1) - 時代差を中心に、保健科学 29(7)、473~478、1987
- 3) 上田礼子、幼児の家庭刺激に関する研究(2) - 地域差を中心に、保健科学、30(1)、58~63、1988



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:急速な都市化現象は家庭にもさまざまな変化をもたらし、子どもの発達上必ずしも好ましくない状況も出現してきている。本研究は時代差および地域差に関する調査を実施し、幼児の発達上リスクの高い家庭刺激を見つけるためのスクリーニング用項目を明らかにした。